第四條　漁業者並に水夫雇夫共薩哈嗹に於いて、燒酎の類又は酒を露西亞人又は土人に賣り、或は品物の交易するは禁制たるべし、尤も其雇人のアイノ人に限りては、毎日仕事を仕舞し後にて一杯宛の酒を飲ましむるは構えなし、若し此掟を破りし者は、露國の法度即ち一千八百七十六年の發布に係る第五百四十三章徵稅第三章及び第一註の第五追加に基き、露貨五百五十留の罰金を取り立てらるべし。

第五條　網を以て川々を建切る事堅く制禁たるべし、若しこの法度を破りし者は、以後其漁場に於いての漁業を差止め、又は捕へし魚其外漁具共政府に取り上げらるべし、若し他人が此法度を破りし事を見留め、其旨日本領事館へ屆出たる者は、褒美として捕えし魚三分の一を與へ、並に以後其漁場に於いて漁業を爲すを許さるべし

第六條　アイノ人並にオロッコ人を雇ひ入れるには、相當の骨折賃を出し、相互の納得に因るべし、漁業者共は決して土人を苦しめ、又は辱むべからず

第七條　漁業者は脫獄懲役人を雇ひ入れ、又は匿置くか、或は匿れ場所を與ふることは禁制たるべし

第八條　薩哈嗹島よりアイノ人を日本國へ連れ行く事は堅く制禁の事

第九條　出稼漁船は地方役人の許可なく商買する事は堅く制禁の事

右の條々吃度可相守心得違の者なき樣、漁業者並に船司よりは水夫雇夫共に篤と申含め置くべし、此段諭達候也

明治十九年六月廿二日

副領事　久世原

かくして、露國の壓迫は日を逐ふて拍車をかけたが、遂に漁業者はこれに反抗することとし、薩哈嗹漁業組合なるものを新設し、邦人漁業の發達を圖ると共に露國の、壓政に對し矛を向け、一方に於て、秩序的に活動を續け、明治三十五年外國領海水產組合法が施行されるまで、幾多の漁業者が汗みどろになつて、努力を續けたのである。かくの如く邦人漁業家が苦鬪の歷史を繰り返してゐる間に、常に陰に陽に邦人漁業家の爲に偉大なる努力を拂つた人々がある。即ち薩哈嗹島漁業組合が血みどろになつて壓政と闘つてゐる間に、組合幹部は考へた。これはどうしても、駐在長官、陸軍屯營所その他の 官吏と親密なる 交際を續け、所謂私的外交をせねば效果は擧らぬだらうとし

て、高井義喜久、稲川猛治と云ふ二人の在留邦人中より、私設外交官を選抜してこの衝に當らしめることになつた。兩氏は流暢な露語をもつて露國官吏の間をかけ巡つて親交を結んだ、その結果暗雲低迷の兩者の間が俄に好轉し、漁業免狀下附の如きは組合の願ひさへあれば文句なしに下附されたものである。かくするうちに、日露の國交斷絶となつた、即ち明治三十七年二月十一日である。居留民の不安は日に日に加へられて行くうちに遂に開戰となつた。コルサコフの我が日本領事館の菊の御紋章はとり除かれ、樺太全体に暗雲が漂ひ、刻々とその影が深み行くのであつた。

高井通譯

時の領事は野村氏であつたが上京不在中であつた爲留守居の山口書記生が事に當つてゐたが、然しその中にあつて、露國官憲との交渉を見事に切拔けて行つたのは高井氏であつた。その時であるコルサコフ長官ケルバ氏及陸軍駐屯アルチスキー大佐が自ら組合に高井氏を訪問して「日露の國交斷絶は何れ戰端が開かれるであらうが、戰ひは國と國の戰ひである。個人々々の友情に何らの變りもなく、又恨のあるべき筈がない。故に當地に於ける居留民は勿論越年漁業者に對して何等心配の要はない。今迄通りに遊びに來て下さい。」と親切に心からの親しさをもつて好意を示してくれたので、始めて居留民は安堵の胸を撫で下したものであつた。高井氏は更にこの長官より特別優待許可證を受けて、この報を不安の裡に生活をしてゐる東海岸の各地は勿論、灣内西海岸の各漁場へ馬に跨り、草叢を押し分けて各漁場へと報告した。そして直に樺太を引き揚ぐべしと傳へ全部國領に無事歸還せしめたのであつた。若しもこの時に當つて、高井氏が露國官憲と親交を結んでゐなかつたならば如何なる結果を招來したか既に想像に餘りあるものがある、州長官も邦人が愈々コルサコフを引揚げんとした際「みなさん達者で暮して下さい、もう二度と生きては會へないだらうけれど」と云つてパンや角砂糖などを船中で使つてくれと人々に與へ涙ながらに分れたのである。この物語りは一つのうづもれた國際美談として云ひ傳へられてゐる。

　然し一方露國政府は後に至つて、官憲がかくの如き敵國民に對して待遇した事は類例がないとあつて、遂に長官の態度が問題となり罪されたと云はれてゐるが、それにしても麗はしき人情の發露ではある。　――（高井氏は目下函館に健在で余生を送つてゐる）――

海豹島の海賊譚

島を狙ふ四隻の海賊船
俄然島は鮮血に彩らる
—【島に眠る十四の魂】—

今では海貂島もエロの島と名づけ樺太名物の一つとして、視察者の眼を喜ばしてゐるが、明治の初年から十年頃にかけて、東北北海道方面から膃肭獸の密獵隊が續々島に押しかけ、密獵に從事したものであつた。而もこれらの船は、寶の島海豹島を夫々我が物にすべく、互に血の雨を降らして爭つたものである。この物語りもその一つで海豹島を中心に四隻の海賊船の乘組員が、入亂れて戰ひ、遂に一隻は擊沈され十余名の海賊共は海底の藻屑となつたと云ふ悲壯なる海戰譚である。この事實は當時暗から暗に葬り去られてゐた爲に殆ど人には知られてはゐない。

島を狙ふ四隻の海賊船

明治五年の夏であつた。順風に帆をはらませた二隻の帆船が漂渺たる海原を蹴つて海豹島さして進んでゐた。船は百噸足らずの小船であつたが、船員達はどれも一癖あり氣な面がまへをした若者どもで、彼等の大部分は腰に二本さした武士の姿であつた。

一隻は神通丸、他の一隻は御影丸といひ、共に當時津輕の山口義兵衛所有の海賊船であつた。船員達は函館五稜廓に立籠つた榎本武陽の配下で、志を得ず遂に義兵衛の企んだ海賊船に乘り込んで、沿海洲から遠くはカムチャツカ方面にまで出かけて航行中の船を襲擊したり、沿岸を荒しては海賊を働いてゐたものである。彼等の本據は最初海馬島であつたが、何時の間にか目をつけたのはこの海豹島であつた。船舶の襲擊よりは安全で而も確實に金になると云ふので、毎年三千頭近くの膃肭獸を撲殺しては秘に毛皮の密貿易をやつてゐた。

神通丸の船長は五十の坂を三つか四つ越したと思はれる老荒武者で、腰に大小を手挾み、數多の船員中にたゞ一人のちょん髷姿をしてゐた。彼の名を佐山吉三郎と云ひ御影丸の船長も兼ねてゐた。腕や膽力にかけては船員達が束になつてかゝつても到底彼の敵ではなかつたのである。船は何時の間にか海豹島近くに進んでゐた。

——島が見えた、撲殺の用意だ——

船長はどら聲を張り擧げて、船員達に上陸の準備を命じたのである。船は次第々々に島に近づいた。折柄、突如島蔭より現はれたのは二隻の帆船であつた。當時海豹島は殆ど神通丸の繩張りであつたので、この以外な帆船を見た船長の驚きは一方ではなかつた。

——この島は俺達のものだ、俺達の島を荒す奴は誰であらうが殺してしまへ——

氣の荒い船員達は早や戰ひの準備を始めたのである。船長は帆柱を脊にして兩手を拱きぢつと何事か考へてゐた。何時しか船長の顏には決心の色が漂つたのである。

——若し島を荒す船であつたら、積荷一切を掠奪しろ、反抗する奴は誰彼の容捨なく、斬り捨てゝしまへ——

部下を集め船長は刀の柄を叩きながら大聲で叫んだのである。神通丸には十餘名、御影丸にも十名ほどの船員が乘つてゐた。命令一下忽ち武裝の用意に取りかゝつたのである。御影丸に船長代理を勤めてゐる高山三郎と云ふ荒武者があつた。彼は船長佐山の片腕となつて、いつも船舶襲擊には一番槍の功名を立てゝゐた。腕にかけても他の船員達に比較してはるかに勝れ、膽力も又据つてゐた。顎にはぼう〳〵と髯を生やし、見るからに海賊船の幹部として相應しい面かまへである。

ギー〳〵櫓を漕ぐ間に武裝船員達は酒樽を拔いて、首途の祝ひにと冷酒をガブ〳〵と呷つた。

高山はギラリと拔いた刄に水をかけながら、二三度振りつゝ武者振ひをした。

寶の島海豹島、それを何時までも神通丸のみが我がもの顏に獨占は出來なかつた。その頃、松前藩の樺太會所の役人達が何時の間にか、この海豹島に目をつけて、國歸りの際、藩の同僚達に、樺太東海岸に海豹島のあることを說き、若しこれを獲るなら莫大な金が得られるであらうと紹介したものである。これを聞き傳へ雄圖を抱いた一人に伊吉武五郎と云ふ武士があつた。彼は機會あらば樺太に押し渡り、寶の島の扉を開かんものと同志を狩り集めてゐたが、如何に有望な島と云つても航海不案內な海豹島に渡ることは非常な冒險であつた。野心鬱勃たる伊吉は遂に空しく八年を經過してしまつた。けれど、彼はどうしてもこの企ては放棄することが出來なかつた。遂に浪人共二十餘名を集めて二隻の船に分乘、明治五年の春函館を出帆して、樺太に向つたのである。

かくて船は途中幾多の危險を犯して漸く西海岸の本斗附近に寄港し、それよりポロアンドマリを經て海豹島に着いたのは六月下旬であつた。一行は島に上陸して直に撲殺を始めたのである。滯在僅か十數日に過ぎなかつたが、一千餘頭を撲殺し船にどし〳〵皮だけを積込んだ。

島は鮮血に彩らる

或日のことであつた。はるか地平線の彼方に二隻の帆船が突然姿を現はした。船の姿が次第々々に大きくなるにつれ、まさしく島を目指して進んで來る船である事がはつきり判つたのである。團長の伊吉は不審でならなかつた。この島の所在を知つてゐる者は吾々一團のみである。だが船は確に島に向つて進んでくる。やはりこの船も島の寶を狙ふ海賊密獵船の類か……團長は直感したのである。

——密獵船の襲擊だ、若し船を襲ふ場合は容捨なく發砲しろ、上陸させるな——

二十餘名の浪人共はすはこそ、覺悟の上だ、こうなれば一人殘さず海獸の餌食にしてしまへと、

應戰の準備を整へ寄らば斬りまくるべく、各自の部署を定めたのである。二隻の船、それはまさしく神通丸と御影丸の姿であつた。

船は岸邊に着いた、荒武者達三十名は手に手に刀を持ち上陸を始めた……このときである。突如として岩蔭で數發の銃聲が鳴つたと思ふや、いゝ、あゆみを渡つてゐた一團のうち四人の武士がバッタリともんどり打つて海中に落ち込んだ。

——それ敵の不意打ちだ、乘り込め——

憤怒に燃えた團長は拔いた刀を振りつゝ襲擊の號命を下したのである。遂に戰の火端は切られた。佐山の率ゆる一軍と伊吉の率ゆる一隊と、端しなくも海豹島中心に凄慘な血の雨を降らして爭つたのである。佐山軍は何づれも武士、而も腕にかけては一騎當千の猛者揃ひである處から、斬り込む矛先きは鋭かつた。一軍を激勵しつゝ團長の佐山と首領代理の高山の腕は愈々冴えた。二人は忽ち四人を斬り倒したのである。死に物狂ひで抵抗する伊吉の一隊も遂に敵はず、今は早や逃げ足立つた。佐山軍は逃れんとする敵を追ひ縱橫無盡に斬りまくり、瞬く間に九人は紅に染まつて打ち倒れた。部下九人まで殺された團長の伊吉はもうこれまでと觀念し、名乘りを擧げて佐山と一騎打ちをしたのである。けれど到底佐山の敵ではなかつた。哀れ伊吉も胴体を眞二つに、血煙揚げて斬り殺されてしまつた。

團長を打たれた伊吉の一隊は戰ふ氣力もなく浮き足立ち、濡れ鼠のやうになつて、積荷船を置去

りに繫留船に飛び乘つて、命からぐ〵沖合へと逃れた。佐山は血のべつとりとついた刄を振つて薄氣味惡い笑を漏らしたのである。味方四人は殺されたが戰ひに勝つた佐山軍は敵の置去りにした船より毛皮を分捕り船はその場で燒棄て、敵の死骸十個を海中に投げ込んで、悠々と密獵を働いて引き揚げたのである。絕海の孤島に空しくも恨みを呑んで死んだ十四の魂は、今もなほ人に知られず眠つてゐるに違ひない。爾來六十一年の星霜は過ぎた。海も在りし日のことゞもなどは忘れたかのやうに、島の岸邊を洗つてゐる。

附記　戰ひのあつた場所は現在膃肭獸を撲殺する附近であると傳へられてゐる。なほ佐山の海賊船に船員としてアイヌが數名乘り込んでゐた。

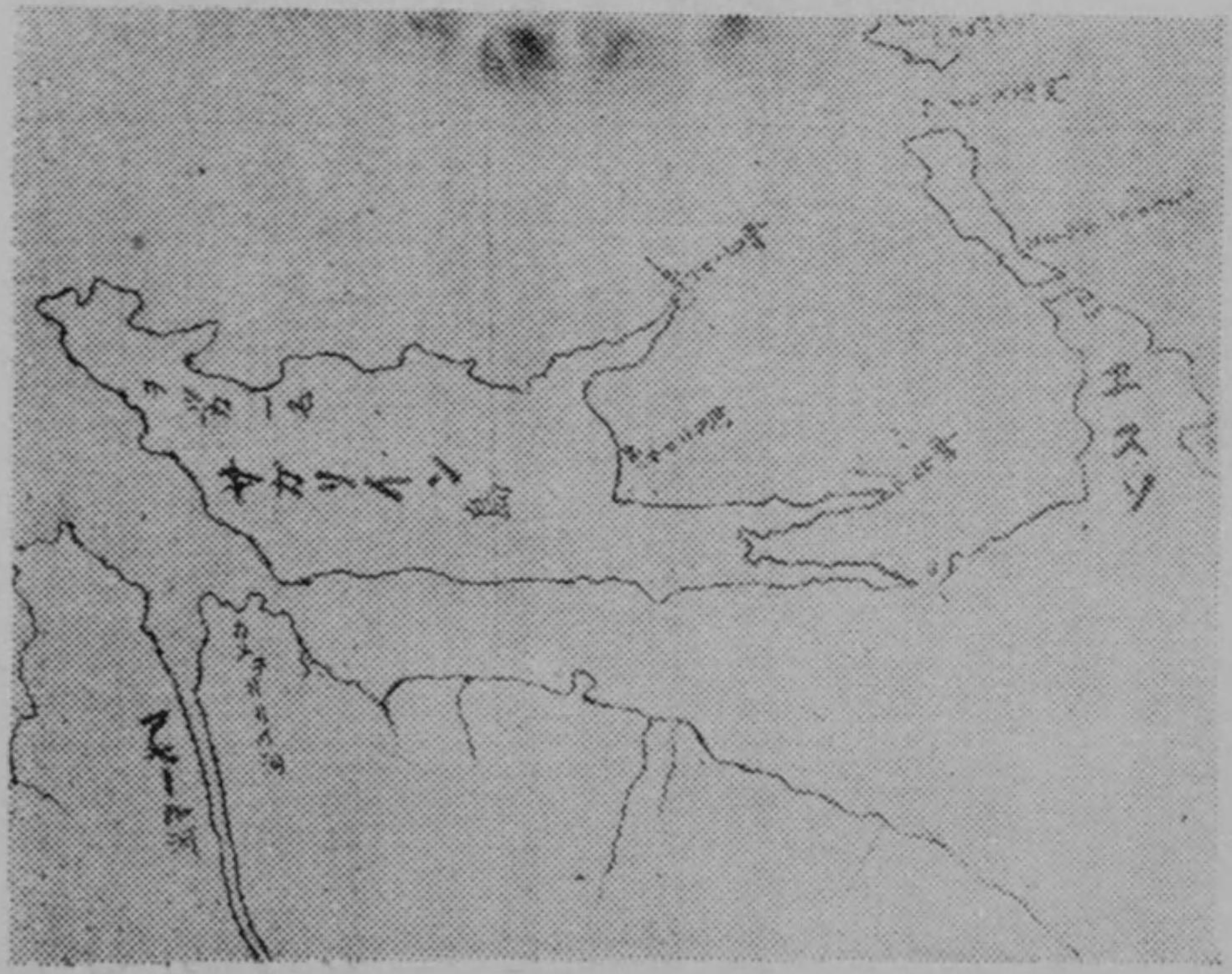
其の後この海豹島には、各處から海賊船が押しかけ密獵を働いたが、血の雨を降らすやうな爭ひなどは起らなかつた。

樺太探險秘話

探險者の苦鬪

――【附外國人の探險家】――

1780年（安永庚子年）アンゲリア國（英吉利）アルロスミツト氏製圖の航海圖



內地人で漁業や營利の目的で渡島した者は可成以前からであつたが、少くとも探險家と名の付けられる人々の渡來したのは松前氏の領育以後の事である。一說には寬永元年（今より三百余年前）に松前藩主の松前公廣が樺太の南端に上陸したと云はれてゐるが、只それだけの事で、他には何等の記錄もないのであるから、眞僞の程も全く不明である。それから十年を經て即ち寬永十二年に、松前公廣が其の家來の上村掃部左衞門を派遣し、慶安四年（今より二百八十余年前）には松前公廣が、其家來の蠣崎傳右エ門を派遣して島情を視察せしめた。是は事實らしいが、やはり事蹟を調査すべき何等の文獻も殘してゐない。それから後に於ても、慶安四年に松前藩士和田、新井田の兩氏が渡島、寬文十年には松前藩主松前廣織が、北海道の北部を巡視し、序でに樺太行を企てたが、海上時化のため中止した。元祿元年には蠣崎傳右衞門が再び探險して、地圖を幕府に提供した。續いて明治二年には、松前藩士和田某が、島の沿岸五六十里を視察し、安永六年には同じく新井田隆助氏が渡航して南部地方を探險した。

×

以上は松前藩が探險したのであるが、天明五年三月（百四十余年前）には大石逸平氏が、幕府の命令に依つて、樺太を踏査した。大石逸平は最上德內と同じく、本田利明の門人で、其頃北邊開拓の急務を知つて居た一人である。彼は菴原彌六宜方、皆川沖右衞門秀道、青島俊藏政敎、佐藤玄六郞行信及び山口鐵五郞と云ふ商人と共に江戶を發足した、此の時北方の警備、北方の開發を唱導し

た彼の師本田利明も一行に加はらんとしたが、病の爲め止むなく中止した。最上德內の手記に依れば、特に浪人して居た大石逸平、最上德內の兩人も雇ひ上げられ、先驅として奥地に這入つた。逸平は樺太島から山丹口（沿海州）までを見屆け、德內は千島方面を探險したと云つて居る。又靑島俊藏が編述した蝦夷捨遺には次の如く書いてある。

「從者德內は意氣あり、天文數字にも通じ、赤人に近づき寢食を共にして略是に通じ、又副僕大石逸平をカラフトに遣し巡行せしめ山丹と應對せしむ。」

當時の大石の探險した地點は不明であるが、灣內を巡行し、西海岸はクシユンナイ邊まで及んだやうである。そして自ら樺太島圖を描き是を校訂するために土人をして砂土に地形を描かせ自作の地圖を校正したといふ。

後六年を經過した最上德內の樺太探險は寬政三年である。その時德內は御普請役に拔擢されて、御小人目附和田兵太夫を同伴した。踏査した所は灣內及西海岸クシユンナイ附近まで、大体大石逸平の探險區域と大差ないが、その間ロシヤ人と應接し、その視察は頗る綿密で自記の文書は今尙存在して後人を稗益して居る。

次の探險者は中村小市郞、高橋次太夫の二人である。享和元年五月、樺太見分の命令が、當時北方に出張して居た幕府の官吏から出たので、二人は五月三十日宗谷を發して白主に到着した。それより四年を經て寬政二年高村一寬氏が、西はコタントル（今の鵜城古丹川附近）に到る間を視察し、その翌年には松前平角、靑山園右衞門、高島壯四郞、鈴木熊藏の諸氏が渡來し、西海岸はノテト（今の北樺太亞港の北）より東はシンノシレトコ（知床岬）に至り、黑龍江の土名マンコウ河の事情を究めた。更にその翌年には再び最上德內氏が、西はクシユンナイ（今の久春內）より東はトーフツ（今の遠淵）に到つてゐる。其後になつて中村小市郞、高橋次太夫、松田傳十郞、間宮林藏の有力な諸氏が相ついで渡り茲に樺太の事情は漸く鮮明になつたのである。

×

中村、高橋の二人は享和元年五月、樺太探險の命が當時北地出張の幕府の官吏から御普請役の中村小市郞、御小人目附の高橋次太夫兩氏に降つた。兩氏は五月三十日、宗谷を出帆して白主に到着し、中村は東海岸を巡り、高橋は西海岸を巡る事とし、道をわかつて白主を出發した。

中村はノトロ岬を東に廻り、亞庭灣の西部を北上して、土人部落のチシヤ、コンブイ、ポロナイポ等を經て留多加に達し、是よりシユシユヤ、トコリオンナイ、クシユンコタン、トウブツ等灣內の各所に寄泊して知床岬に到り、是より岬を東に廻つて北上しトンナイチヤ（富內）を經てナイブツ（榮濱）に出た。時は恰も七月一日であつたと云ふ。是より更に進んで北上すれば寒季に入り、歸期がおくれる憂ひがあると云ふので、同伴した土人は北進する事を肯ぜず、止むなくナイブツを終點として、日和待をする事三日で歸途についた。歸路はトンナイ湖に入りトウブツ（遠淵）に出て白主に歸着した。一方高橋次太夫は白主より直に北上してトンナイ（眞岡附近）タラントマ

リ（多蘭泊）オホトマリ（大穂泊）ラクマカ（樂磨）トンナイケシ（富內岸澤）ノタシヤム（野田寒）ナヨロ（名寄）クシユンナイ（久春內）ライチシカ（來知志）等を寄泊してウシヨロ（鵜城）に到着、此處から土人の舟に乘り換て、ホロケシトチロ（幌岸）リヨナイ等を經てソーヤ（北宗谷）に到つた。此處で高橋も中村と同樣な理由で、此地を終点として歸途に就かなければならなかつた。時に七月初旬であつたと云ふ。

此兩氏の探險は南樺太の一部分に過ぎなかつたが、當時露國船が樺太の近海に出沒した事は、兩人の報告によつて確實に中央方面に知られ、又土人の情況を察するに於ても、好材料を提供したものと思はれる。

而してその探險區域は必ずしも邦人未踏の地ではなかつた。嘗て松前家が行つた見分は、是よりも遙に奧地におよんだことは既に明かな事實である。けれどもその檢分の結果は、文書の徵すべきものこそないが、官命によつて探險した二人の報告は、樺太に對する當路者の心を動かしたことは疑ひない。その後七年を經て松田、間宮の兩氏の探險があり、樺太の離島たることを確めた。そしてその功名の一半は松田傳十郎に與へなければならぬと思ふ。云ふ迄もなく間宮林藏も、殆ど同時に離れ島たる事を確め、更に進んで沿海州に入つた功名は偉大であらねばならぬ。けれども海峽發見の一部分の名譽は、傳十郎にわかち與へても決して不都合ではなからう。

×

松田傳十郎は甚句で有名な越後米山の產で、最初に仁三郎と云つた。その北邊の事に從つたのは寬政十一年幕府が、北地警衛として五有司を任命した時、その一人に加へられたのが始めである。其の後其職にあること二十四年の久しきに亘つたか、其の間江戶にあること五年、他の十九ヶ年間は全く身を北邊の荒凉の濱にさらした。而して樺太の北境を探險したのは文化五年である。文化五年正月二十二日傳十郎は調役下役元締を仰せつけられ、八十俵、二人扶、役金十兩を給せられた。ついで樺太奧地山丹境界を檢分すべき命令を受けた。此の命令は吟味役高橋仁平から傳達された。そして

一　御雇間宮林藏を伴ふべき事。

一　小船を用ふべき事。

一　多量の飯米を携帶し難きに依り、なるべく干魚を用ひなるべく永き月日を支へ以て檢分の功を全うすべき事。

右の三ヶ條を申渡された。傳十郎の實記に依れば、當時北境の事情は土人も之を詳にせず、樺太が地續きであるか、離島であるかすら全く不明であつたと云ふ。

四月十三日宗谷を出帆して白主に到着し、間宮林藏は東海岸を探險し、傳十郎は西海岸を巡檢する事として、此處から東西にわかれ出發した。當時露船國がオホック海上に出沒すると云ふ事が、土人の間に頻りに傳へられ、且北方にはオロツコ、スメレンクルなどの異人種が居て、危害を加へ

る恐れがあるなどの噂があり、前途の危險測り知るべからざるものがあつたけれども、食米節約上米食を必要とする內地人を從へての行軍は到底できないので、從者としては悉く土人を用ふる事とし、單身異境に入る事に決心した。此時傳十郎は決死の覺悟であつた、卽ち從者には宗谷で遺言として

「若し奧地で落命するか、又は異國船にとらへられるか、或は何年たつても消息のない時は、宗谷出帆の日を命日と定め、一片の回向を賴むと、江戶の家族に傳へてくれ」と賴んだ。

彼の胸中既に生還を期してゐなかつたことが察せられる。その旅程を見るに白主よりまづアトヤタンナイ（今の十和田）に寄り、此の地に三日間滯在して、次にトンナイ（今の眞岡）に寄泊した。こゝで漁場の番人である松前人万四郎と云ふ者を連れて行く事にした。處が白主から同伴して來た土人は、こゝから北進することをきかなかつた。百方手段を盡して說きさとした結果、何れも傳十郎に一命をさゝぐる旨誓つたのである。それから野田、泊居に寄港した。五月十七日ノタシヤム（野田）を出發ナイロ（名寄）についたのである。宗谷を出發してから既に一ヶ月餘を經過してゐた。

ナヨロで酋長のヤエンコロアイノの家を訪ふた。ヤエンコロアイノは滿洲政府から姓名を賜つた。揚忠貞の子孫で、當時ハタラ（名主）の職を帶び、三年每に滿洲政府に敬意を表する爲め、渡滿する事を怠らなかつた。其の頃同人の弟シロトマアイノは恰も渡滿の準備を備へ日和を待つてゐたと云ふ。それからライチシカ（來知志）に寄泊し次にウショロ（鵜城）に次は是より三日の航路でポロコタンに到達し、次にモシリヤ（藻知矢）に着いた。此處からは今迄乘つて來た船を土人舟に乘り換へた。それは從來乘つた大型の船では航行に不便だと云ふ土人の忠告に從つたものである。さらに五里チツチレに寄泊した。此處はスメレンクルアイノの交住の所であると傳十郎は記してゐた。そこでポロコと云ふ多少アイノ語を解り得る土人を通譯にして同行する事にした。處がさうこうしてゐるうちに土人が、數十人海濱に押寄せて來て弓を擬し敵意を示したのである。併し手眞似足眞似漸くにして意が通じ、事なきを得た。是よりアルコイ、ソンライ、ウヤフトウに寄泊して、六月九日ノテト（亞港の北今のツタイ灣附近）についた。ギリヤークはノテトをテツカと呼んで、當時數戶の土人家屋があつた、が土人は傳十郎等の一行を見て非常に珍らしがり、集ひ寄つて不思議さうに環視したと云ふ。其處では土人の酋長のコーニと云ふものが傳十郎に會見を申し込んだ。コーニは年齡三十七八で滿洲服を着け、威風颯爽として如何にも酋長らしい男であつた。やがて傳十郎を自分の家に招じ、龍紋のある錦をもつて作つた蒲團を出して、傳十郎を座らしめ、家人擧つて歡待した。そして是より奧地は人煙極めて稀で、飮料水なども亦乏しい事など語り、且出來得る限りの便宜と好意を與へた。斯くて傳十郎は六月十八日まで此處に滯在し、東海岸を迂回して來る間宮林藏の消息を知らうとした。けれどもいつまでたつても、林藏の消息は知れなかつた。そこで傳十郎は出來得る限り北進し、北部の地理を見極めた上、東海岸に出で間宮に會せんと決意

し、六月十九日ノテトを出發しナッコに赴いた。ギリヤーク人はナッコをラッカと云ひ此邊からは滿洲へ最も近い干潮の時は、海草が海上一面にあらわれて陸續きかと思はれる位であつた。船を海岸に止めて陸行しラッカ崎に至り岬端に立つて四方を展望した。滿洲の大陸は一水を距てゝ、近く相對し、遠方は雲に沒し、黑龍江の江口も手に取る如く右方に認められる。樺太の離れ島である事は最早疑ふべき餘地がない。傳十郎は此處を以つて、日本との境界と確認し、地形略圖を作りもと來た路をナッコの濱に出で、ノテトに歸航した。舟が將にノテトに入らんとする時、恰も東海岸から引返し、西海岸を北上して來た間宮林藏の舟と漸くこゝで邂つたのである。

×

是より先白主で松田と別れた間宮林藏は東海岸を北上し、日を重ねて漸く北知床半島に到着した。此處から海角を廻つて更に北に進まんとしたが、到底その目的を達し得ない事を知つたので、止むなく、引返して眞縫に上陸し、山道を横斷して西海岸のナヨロに出たのである。其處で松田の消息を土人に尋ねた處、深く奥地に行つたと云ふ事を聞き、直に追尾してこゝに到つたのであつた。松田は既に樺太の離れ島である事を確め、國境を見屆けたから、是から南歸しやうとしたが、間宮林藏は折角此地まで來て、國境を見ずして歸るのは甚だ遺憾とし、更に進まんとしたが、土人は間宮一人では從つて行く事をきかなかつた爲、松田に同行を依賴した。松田は多少迷惑を感じたが其の志を無視するに忍びず舟をナッコに返した。

林藏は先に傳十郎が究めた地點より一歩でも奥地に入れば、即ち自分の功であるとして、傳十郎を其地に待たせ進み出したが、岬角より奥地は到底歩を移す事が出來なかつたので斷念し相携へて歸途につき、七月二十日宗谷に着歸した。此とき宗谷には河尻肥前守を始め高橋三平、深山宗平太等の諸士が出張中であつたので、二人は共に探險の實況を報告したのである。そして傳十郎は一旦江戸に引返し、幕府に對して報告する事になつた。是がため松田は同年の十二月二十七日、探險の功に依り幕府から金十兩、白金五枚を賜はつた。一方間宮林藏は翌文化五年再び樺太探險のため出發し、七月十三日北海道の宗谷を出帆し、その日の中に白主に着いた。其處には土着の土人が少かつた爲め、奥地に隨行せしめる土人を雇ふ事が出來なかつた。そこで土人舟の奥地に行くのを待つて三日間滯在した。十七日土人舟に乘つて此處を出發五日間を經て二十三日トンナイ（今の眞岡）に到着した。此處に番屋があつて土人を指揮する番人もあり、土人も亦多い處であつたから、番人に舟子となるべき者を選ばせやうとした。けれども前年の夏初めて探險した際、連れて行つた土人等が歸村後、奥地に恐ろしい夷人が居り且風土も著しく違ひ、行路もひどく困難である事を悟り傳へた爲、從ひ行かうとするものは一人もなかつた。彼是してゐるうちに八日間を過したが、此の間に種々畫策して漸く六人の舟子を雇ひ得る事が出來たのである。

八月三日此處を出帆、十三日を經て、八月十五日リヨナイデ一泊した。翌十六日山丹夷（オロッコ、ギリヤークの類）が六艘の船に乘込んで此處に到着、林藏に從つて居る土人を捕へて種々なる

妄言を弄し、奥地に入る事の至難なる事を説いた。而もその上土人の携行した食糧、酒類、雜具などを奪はんとしたので土人等の驚きは一方ではなかつた。しかも言語がよく通ぜず、少からず當惑したが、米酒若干を與へて慰撫することが出來たのである。更に此處から舟を出して山丹夷等は南をさして去つた。處が此の始末に驚いた土人等は何うしても此處から北へ行く事を拒んだ。併し林藏は今是を中止しては到底再擧を圖る事が出來ぬと考へたので、酒などを與へて漸くなだめ、斯くて十一日間も其處に滯在して、海上の風波も凪いたので、二十五日同所をたち、九月三日トッショカウニ到着した。

此のあたりは既に奥地深い上に、日を逐ふて寒氣を增し、糧食も漸次減少したので同伴の土人等は頻りに歸らん事を願つた。林藏は此上强ひて進むと云ふ事は出來なくなつたのでやむなく舟を返し、九月十四日リヨナイに歸つた。けれども林藏は此のまゝ歸るのは如何にも殘念であるので、此上は海上の凍結を待つて氷上を徒步で奥地に入らうと考へた。そこで十月二十四日までウトニシと云ふ土人の家に寄食した。ウトニシは篤實な男で林藏に同情し、林藏の所持品一切を自己の土藏内に保管し、他の土人等の掠奪を防いだのである。そのうち積雪は漸次山野を埋むるに至つたが、海上は容易に凍結しやうとも思はれなかつた。氣ばかりは急いだが、如何とも策の施し樣がない上、肝心の食糧も殘り少くなつたので雜具をウトニシに托し六人の同伴土人のうち四人は既に歸つたので殘りの二人を從へ、折からの積雪を冒して陸行し十一月トンナイに歸着した。其處で土人の家に寄食しつゝ越年し正月の廿九日まで滯在、其間に食糧の準備など整へ、廿九日此處を出て再び奥地の探險に向つたのである。二月二日ウショロ（鵜城）に到着したが此處から奥地は滿州に附隨し、しかも土人の住んでゐる處であるからと云つて、林藏の同行した南部の土人等は彼等を恐れ、且前年山丹夷の狼藉の事など思ひ出して、何うしても前進する事を肯じなかつた。林藏は止むなく六人の土人のうち最も勇敢なもの一人だけ殘し、後は皆歸らせてしまつた。そして其處で辛うじて土人五名を新に雇ひ、四月九日ノテト岬に到着した。その頃ノテトには土人の住家が三戶、土人が六十九名ほど住んでゐた。海は未だ凍結中で舟を進める事が出來なかつた爲め五月七日まで同地に滯在した。そのうちにウショロから雇つた土人が又北進することをこばんだ爲、同地で又一人の土人を雇ひ道案内とした。五月八日山丹舟を借りてこゝを出發し、十日イクタマーと云ふ處に到着した。

土人が亦前進する事を恐れ出したので、こゝでも亦土人一人を新に雇ひ先導とし、十二日そこを出發した。その日のうちにナニラーと云ふ處についた。

ナニラーは極く小さい島で家屋が僅か五六軒、ノテトからこゝに到る間は沿海州と向ひあつて、大陸との間が極めてせまく潮流は北の方に向つて流れてゐる。けれども波濤の激する心配もなく、小舟でも安心して進退が出來る。此處から北は海が段々開いて、波浪も高く時によつては船が轉覆せぬとも限らぬので、山を越えて東海岸に出樣としたが土人等は從はぬので、仕方なく十日舟を引返して、十九日ノテトに歸つたのである。其うちに糧食もつきんとしたので、米飯はなるだけ節約

し、大抵魚肉草根木の實ばかりを食つてしのいだ。一日の食糧は後には一杯の米粥のみとなり、唯々飢せざるを願つた。而も同伴の土人は皆怠惰で何の用にもたゝず、是をさとして漁獲を行はんとしても更にしやうともせず、毎日なす事もなく、俯仰してくらすばかりであつた。かくて携帶の所持品も殘り少くなつて、如何とも方法はつかなくなつた林藏は、此上は一人で此處に止まつて東海岸に出樣と覺悟し、六人の土人を歸さうとしたのである。土人等は直に歸らうとしたが、酋長ユーニは長い間一人で滯在してゐるうちに病死せぬとも限らぬ。万一病死の際などは日本國から、われ〳〵が殺したなどゝ疑ひをかけられても仕方がない。それだから從來の一二人を止めて、もう一度島の周圍を探險に出かけたらと申出た。けれども此企に贊成する土人は一人もなかつた。止むを得ずズル〳〵其處に滯在して奥地の模樣をコーニ等から聽取したりするのみであつた。彼の話に依つてロシアとの國境も遠くなく、時折は夷船に乘つて精巧な火器を用ひ、海に獵してゐる事などがあるといふ事をきいて、益々國境を究めねばならぬと考へたのである。林藏は幾年此處に止つても、必ず國境を究め樣と決心し、遂に土人の家に寄食して、其の業を扶け、或時は流に漁をし、或時は山に木をきつたりした。處が此處の土人の風習として甚だしく女尊男卑である。男夷は常に女夷に媚び、専ら女をたすけ犬馬の勞に服した。そこで林藏も或時は木や野草の根をとる手傳へをし、或る時は自ら着てゐる着物をさいてメノコに與へたりした。併し是には又一方男夷の嫉妬を受けるおそれもあるので、一方ならぬ苦心を要したのである。其うち彼等と親しむ樣になつたが、漸次親しむにつれて彼等は又うるさい位寄り集まつたが、巧に是に應待し時々東岸の地理や露國との國境の事について、ぬかりなくたづねたのである。そして此島は離島であり、例へ東岸に出てもロシャとの國境はわかるまいと聞き、何うしても沿海州に渡らなければなれなぬと思つた。

沿海州にはオロッコ其他の土人等が各部落を形成して、住つてゐると云ふ事をきいてゐたが、勿論はつきりせず、デレン官府と云ふものがあるとは聞いても、何者が置いたのかすら解らなかつた。林藏は命令を待たずして異境に入るのは、國禁を犯す慮があるとは思つたが、究極を探險せずして歸つたのでは、再度命を受けた甲斐がないと思ひ、土人が意を以つて渡る時に、同行しやうと決心した。

そこで林藏は日頃特に懇意にして居いた女土人を先づ說き、彼等から男土人に同行を依賴したのであるけれど土人は、遠く異鄕の事でもあり風土も著しく亦違ひ、且其風習では彼の地の土人から怪しまれ、ます〳〵嘲弄されるであらう。まして長途の旅であり、その困難も一通ではない、若し强ひて同行してもきつと途中で病氣になつて、死ぬであらうと頻りに止めた。けれども林藏の決心も斷乎たるものがあるので、遂に舟の操縱を援助する事を承知したので、漸く同行する約束を結んだのである。此處に於て林藏は手紙を作つて從夷に渡し、且それまで記錄してゐた探險の書類一切も併せて「自分が若し万一の事があつて歸らぬ樣な事があつた場合、お前は是を白主の役所に差出して呉れ」と依賴し林藏は悲壯な決心をしたのである。

斯くて文化六年六月二十六日ノテトの土人四人、ウヤクトウの土人三人、是に林藏を併せて一行八人、長さ凡そ五尋幅四尺位の山丹舟に乘込んで、ノテトを出發したのであつた。其日は恰も風强く到底海峽の横斷は困難であつた爲、途中から舟を返しラツカに碇泊して五日間をむなしく過した。六月の下旬とは云ふものゝ風は殊に冷やかで、霧が深く立ちこめ、衣類は悉く打濕つた。此處には産業と云ふべきものがなかつたので、碇泊中は殆ど草の根を食つて過したのである。これが爲林藏は腹痛を起し、漸次氣力が衰へて行つた。其後も一行はあらゆる困難と欠乏に耐へて、マンゴー河（黑龍江）を遡り、七月十一日遂に滿洲假府の所在地デレンに漸くにして到着する事が出來たのである。林藏は其處に滯在すること七日、土人等が進貢の禮を終るを待つて、七月十七日歸途の用意を整へ、別れを告げて發船した。八月二日マンゴー河の河口に達し、それより海岸に沿ふて、ワシカシ、チヨーメンチチヤカイバ、ハカルバー等に寄宿し、七日早朝ハカルバーより再び海上を樺太のワケン（今の北樺太ワーズの邊か）到着、其夜はラツカに泊し翌八日フラトに歸着した。此處には曩に殘しておいた二人の土人が居たが、一行の無事であつた事を知り、彼等は狂喜して迎へたのである。しかして其處に三日間滯在したが、その頃丁度、土人の舟が獵の爲め南下する準備を整へてゐるものがあつたので、土人と共にその舟に乘込み、十一日滿洲同行者と別れて南下した。斯くて白主に歸着したのは九月十五日で同日の二十八日には宗谷に歸り着いたのである。官命重く身は輕く、勇猛不撓の覺悟を定め、到底普通人の耐へ得ない困苦欠乏に堪へ、あらゆる危險に遭遇

しながら少しも辟易せず、遂に任務を全うした林藏の不拔の精神は、誠に偉大なりと云わなければなるまい。一度ならず二度までも、樺太探險の冒險旅行を敢行、更に當時の人々が考へてもみなかつた沿海州にまで押渡り、其邊の氣候、風俗、習慣等を視察し、而も滿洲假府の所在地であるデレンまで、足跡をしるしてきた林藏の功績をかぞふるに

(一)地理的に樺太の島なる事を見定めた事

(二)樺太に於ける我領土權を見定めた事

(三)幕府の施政經營をして、愈々實際的に進捗せしむるに至つた事

等である。更に是が天下後世に及ぼした精神的の影響、歷史的の功勞に至つては、實に永遠不朽のものがあらふ。其後幕府は樺太に對する方策を緩めること三十餘年、安政年中に到つて幾回となく樺太の巡察が行はれたに拘らず、多くは古人の足跡を踏むに過ぎず、依然として東は北知床半島以南、西は海峽附近以南の範圍を出でなかつた。尤も安政年間栗山太平と云ふ者が、北知床半島の北方に進んだ事はあるが、惜しいかな此人は中途で死んでしまつた。

又松浦竹四郎氏の樺太踏査は最も綿密周到で、其範圍こそ南樺太の圈內を出でなかつたが、縱横の足跡は前人の曾て通過せざる處に及び、其調査した處は、精密を盡して居る。けれども要するに安政以後の踏査は、既に探險の域を脫し調査の域に入つたものと云へる。更に北樺太の未見の地は岡本宣輔氏が明治初年頃、樺太のため努力した事は云ふ迄もないが、同氏は慶應元年四月一日、ク

シユコタン（楠湊）を出發し、西村傳九郎外數名の徒弟を随へ、先づ東海岸をめぐり、遂に樺太島の極北を極め、西海岸を南下し、七月三十日クシユンコタンに歸着した。是が全島一週した最初の記録である。一葉の扁舟に乘つて、行程五ヶ月間を費す。其の過ぐる處は荒寥寂莫の濱で、もとより物資のたよるべきものもなく、魚獸を食つて僅に飢を凌ぎ、土夷と共に起臥して辛くも活力を保ちつゝ一世の大事業を敢行した功績は偉大であらねばならぬ。

彼が北知床を通過した時、そこに木標を建て、その表には「宇知床從志塚凡二十八里程」と書き裏には「元治二年潤五月朔建立」と書し、左右の側面には彼と傳九郎の氏名を記した。思ふに彼等は鑁地旅行中で、本國との通信を絶たれてゐたため、元治二年が慶應元年に改つたことを知らなかつたのであらふ。從來この岬まで到達したものは、安政年中に川上某あり、ついで栗山太平氏あり、殊に栗山氏の如きは、更に北進してツイミ河口のほとりまで、進出したといはれてゐる。岡本氏は六月の廿五日島の極北ガオト岬を通過した。ガオト岬と云ふのは、今のエリザヴーツイ岬である。彼はこゝに上陸して皇太神宮の祠を丘上に建て、一基の木標に「從縫江凡六十里程」と書いた。こゝから西南に向つたがその附近一帶の土人は露語を解する者が多かつたが、蒙古語にいたつてはこれを解する者が、殆どなかつたと云ふ。七月十九日ナヤシ（名好）に達し廿三日ウシヨロ（鵜城）に、三十日クシユンナイに達した。こゝから山道を突破して東海岸ワアレー（輪荒）に出たかくてクシユンコタンに歸つたのは、八月廿三日であつた。土人等は北岬を究めて歸つたといふことを聞いて、人間業ではないと嘆じたといはれてゐる。兎に解全島を周回した岡本の功勞は、東鞋探險の間宮と相ならんで、後世に傳ふに足ることはいふまでもい。

最初の外國人の探險家

學術探險の目的で樺太に渡航した人のうちで、最も古い者として知られてゐるのは、宗谷海峡の發見者であるフランス人のラフイルーズ氏である。氏は佛國政府の命令を受け極北航路探險の目的で、船舶二艘を率ゐ西暦千七百八十五年（天明五年百四十余年前）本國を發して極東に向ひ、千七百八十七年樺太のノトロ岬附近に上陸し、其地方の植物を調査したが、その結果滿洲及び沿海洲地方の植物に比して、樺太の植物は南方植物の性質を帶びてゐる事を發見したのである。其後更に進んでククウレバル山附近を視察した。我國で樺太植物に關する最古の書籍は、現在東京帝國博物館に藏してある「蝦夷草木圖說」と題する圖帳で、是には北海道及樺太に産する植物五十三種を圖說してゐる。而して是は何人の作であるかは不明であるが、其跋文に寛政元年侍醫法眼栗本昌藏と記してあるから、それ以前に著作されたものである事は明かである。

白鳥理學博士は最上德內の一行が寛政四年渡航したので、或は後數年を經て出來たものであらうと云つてゐるが、河野常吉氏は其以前、天明五年幕府より蝦夷地物産調査の爲派遣された、山口、庵原、佐藤

の一行中、翌年樺太に渡つて大石逸平等が調査したものであらうと云つてゐる。

千八百三年（享和三年）にはクルーゼンステルンと云ふものが、ロシア政府の命令で、東亞とロシアの通商を開く爲二艘の船舶を率ゐる本國を出帆し、南米を通りサンドウイッチ島からカムチヤッカに到り、オホック海を渡つて、樺太の東海岸チミー（北樺太ツイム）河口附近を探險して、テルペニヤ灣（タライカ灣）沿岸等に上陸し、山野の樹木鬱蒼たるを見た事を記してゐる。

又樺太の植物を記載した外國書籍のうちで、最も古いものはマキシモウイッチの著はした「黑龍江方面植物誌」（千八百五十九年安政六年出版）で、其材料は前記の佛人ラベイルーズの記事セリムスキー、コルサコフ、ドーイ、ウシヨロ等に於て採取したものに依ると云ふ。

更にシユミットは露國セントピーターースボルグ地學協會の囑託で黑龍江地方及樺太の地質及植物の調査に從事し、千八百五十九年（安政六年）五月露都を發し、八月黑龍江地方に達しブラゴウエスチンスクに於て其年を送り、翌年（万延元年）五月樺太に渡りドーイに上陸し、西海岸に沿ふてトコンボ（吐鯤保）に到る間を探險した。そしてライチスカ（來知志）から山越えしマクンコタン（馬群潭）に出で南下して、眞縫より最峽部を横斷してクシユンナイに赴き、文久元年チイカイ及クシユンコタン（楠溪）に來航した。當時露都大學院の學生グレーンはシユミットの助手としてドーエに渡り、專らドーエ、チイク間の探險に從事した。そして千八百六十一年には、クシユンナイ以南の西海岸に沿ふてアニハ灣を廻り、東海岸に沿ふてイヌヌシナイ（犬主）より山脈を越えてガ

ルキノウラスコエ（落合）附近に到り、南下してクシユンコタンに出で、海路より更に東海岸ナイオロ（内寄）地方に到り、ホロナイ河を調査し、中央山脈を越えて西海岸に出で、イチヤラ山に上りドーエに歸つた。

千八百七十一年から二年にかけて（明治四年……五年）アウグスチノウツチと云ふ人が、バイカル湖及ウラジホ附近旅行の際樺太に渡り、同じく七十二年にはミツリと云ふ者が亦樺太に至り、テルベニヤ灣クシユンナイ附近を探險して歸つた。以上が外人の樺太探險の概略の足跡である。

遠淵湖畔の家屋戰

囚徒遠淵に百名上陸
六百の漁夫俄武士に
決死隊を組織し亂入

遠淵に囚徒百名上陸

露國が東方侵略の魔の手を伸した抑々の發端は、一七〇四年（寶永三年）に露船が、千島占守島に到つて、三十餘名の捕虜を得てから始まるが、爾來露國は毫もその手をゆるめず、更に樺太に勢力を扶植し、暴威愈々急なるものがあつた。

安政四年である、一隻の露國汽船が、ナヨロに寄港したが、乘組員達は直に久春內に移住し、そこに家屋を建築し始めたのである。久春內在住の我が官吏は、その不法を詰つたのであるが、露人は國王の命などゝ稱して聽き入れず、その年は一度歸つて、更に翌五年、再び來つて家屋を建て、文久年間には兩所の露人約六百名の多きに達した。越えて慶應二年九月眞縫の露人は、更に分れて南進し、今度は內淵に本據をかまへたのである。こゝでも露人はどしどし家屋を新築し、愈々魔の手を南方に扶植し始めたのであつた。同三年には亞庭灣內の遠淵に、囚徒約百名を引きつれて上陸したのである。こゝにこの興味ある屋上戰の動機がある。

×

一面張りつめてゐた湖水の氷もいつしか融け、大地からは若芽が萠出ずる四月の下旬であつた。或る日露國の假裝軍艦が一隻、突如遠淵に寄港したのである。軍艦と云つても四五百石積、三本マストの帆船に過ぎなかつた。當時は遠淵湖の入口も相當深く、軍艦なども容易に湖內に入ることが出來たものである。軍艦には約百名の囚徒が乘つてゐた。直に湖水の左岸に陣取り、附近の森林を伐採して、家屋を建築し始めたのである。

露艦遠淵に入港せるの報、一度九春古丹會所に傳はるや、役人の驚愕は一通ではなかつた。その頃會所の役人は丸山作樂を始め、開拓使から派遣されてゐた水戸藩士の尼子大六、齋藤大六等の荒武者二十餘名であつた。この報を手にした役人達の憤慨は一方ではなかつた。事もあらうに見くびつた敵の態度、如何にしても追ひ拂はねば吾等の顏は丸潰れであるとして、丸山作樂は遂に政府に對して、露國の樺太侵略の根據地はニコライフスクである。我は逆に其の根據地を覆へすに限る、それには先づ同地を逆襲して、露人を鏖殺にしなければならぬ。吾に軍艦八隻を貸し與へよ、と無暴極まる意見を幕府に建議したのもこの時であつた。更にそれより一層怒つたのは漁業家栖原であつた。

——眞に樺太は土人と僅少の滿洲人のみである。

然るに吾等は一人の露國人さへも見なかつた當時から、樺太の漁業權を獲得してゐるにも拘はらず、吾等の持つ唯一の好漁場ウショロを始め、今は本據であるマウカさへも侵蝕されてゐるではないか。怨み重なるは露人である。敵は如何に强大國であらうとも、高が百餘人の囚徒ではないか。吾にも數百の漁夫がある——。

憤然としてこゝに露人相手に万一の場合にと、戰ひの準備が始められた。かくして栖原は約六百名の漁夫を殆ど、働かせやうともせず、毎日武道の稽古をつけさせた。櫓や櫂を持つ漁夫共に竹刀を持たせ劍道の練習を積ませたのである。鰊臭い漁場内は、こゝに武道場と變つた。そして極力俄造りの武士養成につとめたのである。更に栖原は六百の漁夫ではなほ足らずとして、西の漁場からも續々として、漁夫を久春古丹に集めたのであつた。かくしてその年は殆ど仕事もせず、養成した漁夫共を續々と遠淵に送り込んだ。そして湖岸の西に露人と對抗する示威策として、露人のそれに倍する程の多數の日本家屋を繼續的に建築し、此の家屋建築以内には一歩たりとも露人を入れずと頑張つたのである。

戰ひの火端は切らる

斯くして其年も湖水を中心として、兩者對陣の許に終つたが、然し一方露國は如何に西海岸を占有するとも、島の首府である久春古丹を陷落せずんば、樺太領有の宣言を發することが出來ないので、露人は又復、家屋の建築にとりかゝつたので、先づ戰ひは露國側から始められたのである。彼等は遂に湖水の西方から侵入し始めたので、栖原も負けじと漁夫共を使役して建築に着手した。遂に双方死力を盡くして家屋の建築に熱中したのである。然し露國は其の巨大なる用材を運搬するにあたつて、馬車、馬橇を使用するに反して、栖原側では全部人力に依る運搬のことゝて、其の建築は半數にも充たなかつた。敵露人は對岸で頻りに何事か惡口をついた。そして聲高らかに勝利を祝福してゐるかのやうであつた。哀れ栖原は折角の家屋建築戰には慘々に侮辱され、遂に敗戰の苦杯を甞めねばならなかつた。栖原側は口惜しかつた。負けてたまるものか、よしこうなればと最後の一大決心を固めたのである。

一軍の總指揮は丸山作樂であつた。彼は當時ニコライフスク襲擊の献策が容れられず、悶々としてゐた折柄とて、漁夫共の覺悟に動かされ、玆に悲壯なる決心をしたのである。

——よしそれならば一つ殘らず家屋を叩き壞してしまへ、万一反抗するものがあつたら、斬り棄てゝも差支はない。異鄕の地で死すとも、これ男子の本懷なり——。

作樂は刀の鞘をたゝいて漁夫共を激勵した。かくて腕に自慢のある漁夫約二百餘名を選拔して、先づ露人が建築した家屋を、一つ殘さず破壞することになつたのである。かくて丸山が率へる二百

有餘の精鋭は、未明を期して、露人の家屋に喚聲を擧げて襲撃したのである。この突如の襲撃に露人達は、大狼狽を極め、右往左往逃げまどい、唯一人として反抗するものがなかつた。そして片つ端から家屋を破壞したのである。さすがの露人も血相かへた、日本人漁夫共の荒れ狂ふさまに、恐れ戰き遂に東海岸へと退却してしまつたのである。

× × ×

戰に勝つた栖原は意氣揚々として引揚げた。そしてその秋の漁期も終へ、漁夫共は夫々郷里へと引揚たのであつた。一方虫の納まらなかつたのは露人であつた。折角建てた家屋も破壞され、その憤激は一方ではなかつた、遂に漁夫共の不在に乘じて、越年番人を追ひ拂ひ、建てた家屋約百餘戸それに漁場、更に漁明に最も必要である薪材や倉庫など、一棟も殘さず放火して燒き拂つてしまつたのである。斯くとはしらぬ栖原はその翌年、再び又戰ひの準備を整へ、更に漁夫までも悉く屈强な若者を選拔し渡航したが、時既に遲かつた。漁舍薪材は烏有に歸し、漁場の生命である舟、漁具等も一つとしてなく、殘るものはたゞ灰燼のみであつた。憤怒に燃えた栖原は愈々最後の決戰に出ずべく協議中の時、遂に樺太交換の御沙汰があつたので、遺憾ながら中止の熄むなきに至つた。實に栖原はこの家屋戰のために數百人からの漁夫を三ヶ年間も、唯遊ばし莫大な經費を要したと云ふことは、僞りのやうな事實である。今もなほ湖水の畔に當時の跡が殘つてゐる。

領有直前の樺太

川西幸八翁懐舊談

現在豐原に悠々自適の生活を營んでゐる川西幸八翁は豐原…往時ウラジミロフカに生活の根據を置いた最初の日本人である。氏が居を定めてから荏苒二十幾星霜は過ぎた、當時血氣盛りの若者であつた川西氏の頭髭には白髭が加はると共に、樺太の島も絕へざる步みを續けてゐる。玆に翁より占領直前の樺太の事情に就て次ぎの如き直話を得た。

明治十八年七月屯田兵として札幌郡篠津村に移轉し、兵役に服する事十年、日清戰爭に出征する事となつたつが途中から凱旋、豫備役に編入されると同時に臺灣に渡り、其處にある事六ヶ年、再び北海道旭川に舞戻り事業に失敗したゝめ北海道廳に奉職し、增毛支廳に勤務した。其處に勤務中日本軍が近く樺太を占領するのだと云ふ事をきいたので私は此際樺太へ押し渡つて一働きやらうと、實弟と妹婿の三人で、樺太へ渡る決心をし、弟壯吉

に二万圓を懷にさせ、明治三十八年八月初め、北海道留萠港に五十嵐億太郎氏のランチに便乘し、先づ海馬島に渡り、二泊のゝち、三百圓と云ふベラ棒に高い運賃を仕拂つて、更にランチで西海岸多蘭泊に上陸したのである。多蘭泊には當時西海岸全土人の酋長をして居た、川村小助（現在初藏氏の親）といふものがゐた。私達が上陸すると、彼はフロックに山高で出迎へたものであつた。酋長始め部落民の絶大な歡迎裡に私達三人は彼の家へ招ぜられたが、其住宅は又頗る堂々たるものであつた。應接間なども和洋二棟式のものを構へ、どうしても土人の家と思へぬ程の立派なものであつた。豫てから眞岡は唯一の不凍港であるといふことを聞いてゐたし、將來發展すべき所はどうしても眞岡だと思つたので、川村の家で一泊して眞岡へ向つた。その頃眞岡にはロシア人でヌイスキーといふものがゐたが、彼は資産もあり事業も手廣く營みその勢力は全樺太を風靡してゐたものである。私共は直に彼れの家を訪れたが、ヌイスキーは非常に喜び種々歡待してくれ、其夜はそこで宿泊することになつた。

ヌイスキーは多少日本語が解せるので、其の夜は色々と談じ合つた。そして私は彼に對して、貴下は今日の權利を近く放棄しなければならぬ時が來る。故に貴下が有する現在の北濱町一帶の土地を讓られたいと申出た。彼も周圍の事情から何れは退島しなければならぬ運命にある事を知つてゐたので、三千圓で彼の所有地全部を讓渡する事を略々承諾してくれたのである。處が翌朝午前四時頃に至つて、突然露兵の一隊が此の家を訪れた。ヌイスキーはこの不意の闖入者に大いに驚き、我々に早く此處を逃れよとせきたてたので、私達はあたふたと海岸さして逃れたが、既に海岸一帶にも露軍の歩哨が着劍して警戒してゐた。是では到底此の場を脱する事が出來ないので、再び引返し今度は山の手の方へ逃れんとしたが、此處も亦歩哨が配置され嚴重な警戒振りで、逃れやうとしても逃れられない。そこで私達は最早これまでと觀念し、ヌイスキーの家へ歸つたのである。其處で遂に私達三人は露兵のために縛せられてしまつた。其の時私達は懷中に二万圓程の金を持つてゐたが、どうせ取りあげられるものなら、身につけて居らぬ方が後難はないだらうと、敷物の下へ隱したのである。露兵達は何事か頻りに質間したが、露語が判らぬ私達は遂に無理矢理に捕へられ、荒貝へと護送された。

×

當時荒貝には露人の使用してゐた空屋が一軒あつたが、吾々は其處に嚴重な見張りのもとに監禁されることになつた。監禁されてゐるうちに、何處で捕へられたものか、日本人が次から〳〵へ拘引され、總數三十六人になつた。そしてお互に姓名を名乘り合ひ、若し殺されるとしても此のうち誰か一人が逃れ歸り、本國にこの有樣を傳へなければならぬと秘かに協議を重ねたものである。同胞達の顏は何れも蒼ざめてはゐたが、然し案外に落ちついてゐた。處が朝の六時頃突然いかめしい露兵が數名現はれ、屋外に出よと命じた。一同は愈々死期が到來せりと覺悟し、早や口に念佛さへ唱へるものがあつた。何が

何やら判らぬ號令のもとに屋外に整列させられた、間もなくタイルスキーと云ふ露軍の大尉が現はれ、意外にも次の様な事を申渡した。

「目下日露軍は交戰中であるが、君等は非戰鬪員であるから一度だけ歸國を許してやる。速刻此の地を立ち去れ、直に歸國せずしてなほこの邊にウロツイてゐる様な事があればその時こそは容赦なく處分する」と命じたのである。

そして一隻の漁船を與へられたが一同の喜びは非常なものであつた。三十六人のうちには多少船頭の心得のあるものもあつたので、すぐに海岸に出て船の準備を始めたのである。

處が愈々命が助かつてみれば、曾てヌイスキーの家の敷物の下に隱しておいた二万圓の金が惜くなる。人々は危險を察し極力思ひ止まらせやうとしたが、私は遂に取返しにゆく事に決心した。一同を海岸に待たせてヌイスキーの家を訪れ隱した部屋に入つて見ると其處には既に露國の將校らしいものが數名控てゐる。

私は矢庭にその場に打ち倒れ、苦悶し始めた。露兵の一團はこの有様を見て大いに驚き種々介抱してくれてゐる裡に、私は其間にすかさず敷物の下に入れて置いた金を懷にねじ込んだ。その時丁度よかつた事には、以前私は海馬島で岩角で膝を怪我してゐた。床の上へ倒れた時に其處をしたが打つたのでやがて鮮血はズボンの上へにじみ出た。何も知らぬ露兵は痕はそれかと思つたものか、親切に繃帶等をしてくれた。私はその厚意を謝する途もなく、愴惶として海岸に逃れ着いた。此處から愈々船を出したが、途中では又「露兵はきつと吾々を船に乘せて置いて、一齊射擊で殺すかも知れない」などゝ云つて人々は恐れ脅へた。兎もあれ力のあらん限り一生懸命に漕ぎ出したのである。けれども焦せれば焦せる程船は廻轉するばかりで却々前へ進まなかつた。

そのうちに午後八時も過ぎ夕闇も迫つたので、一同は漸く安堵の胸を撫で下した。(當時眞岡には露兵二百名程ゐた)

×

なにがさて安心したと思ふと、今迄張り切つた心も弛み疲が一時に出て來る。今は早や船を漕ごうとする者すらなかつた。詮方なく船は波にまかせて漂流することに覺悟をきめたのである。食糧は露兵が多量にくれたので、流れても當分は心配はない、南へ南へ流されてゐるうちに遠く陸岸に當つて火災の起るのを見た。露兵が眞岡の町を燒き拂つたのである。間もなく一同はグツスリと寢込んでしまつた。その夜は微風だにない靜かな夜であつた。

樺太の八月の夜は短い。午前の三時頃ふと目を醒ますと船は青々とした陸岸に近づいてゐることを發見したのである。一同は沿海洲だらうといつて喜んだ。兎に角上陸しやうと云ふので、一同元氣づき船を陸岸に向けた。處がどうだらう。愈々上陸して見ると眞岡から三里程はれた廢地であつた。一同詮方なく再びは善後策を協議したが、名案もなく今迄の元氣も何處へやら、すつかり悄氣返つて溜息をつくものすらあつた。折柄眞岡方面からアイヌが二三人連れでやつて來た。私達はそ

のアィヌに眞岡の様子を尋ねたのである。アィヌの言ふには、露兵達は眞岡を焼き拂ふと同時に一隊は北方の野田に向つて出發したと云ふのであつた。

是をきいて多少は安心をしたが今度捕まると命がないとおどかされたので、多くのものは再び船に乗つて北海道へ逃れ様と云つた。けれども私共三人だけは樺太へ渡つた以上危險を冒してこそ大成功も出來るのだと考へ、歸國を思ひ止まつたのである。

×

斯くて殘る事になつたのは私共三人と、他に一二名きりであつた。此處で私は弟等と別れ、弟達は南部の方で鮭漁をやる事にし、私は再び北上して將來占領された時に經營すべき漁場の調査をする事にした。そして歸りには弟等と阿幸で落ち合ふべき事を約束したのである。弟等別れた私は他の一二名と共に直に眞岡に逆行して、手井で一軒の露人の家に立ち寄り其處で露兵の大部分は既に北上したが、極少數は一里程先に居るかも知れぬと云ふ事を知つた。間もなく眞岡に入り、其處で燒け殘つてゐた露人の空屋を發見し、當分此處に居を定めることにしたのである。そしてその家の表には、日本人倶部占領品と墨黑々と貼札をした。それからは附近の土人に頼んで食糧の準備などをした。

其頃眞岡には露人セメノフ商會漁業用の大建築物が澤山あり（今の局附近）倉庫などは五、六棟もあつて、其中には漁具、食鹽、金物等が一ぱいつめてあり、外には昆布が山程積込んであつた。

私共はその燒け跡にあつた金物、食鹽、昆布などをも、悉く日本人倶樂部占領品と云ふ貼札をした。さうこうしてゐる中に日本人があつちこちから集まつてきて九名になつた。此中には現在西海岸に住んでゐる人もある。是に土人を加へて總員十一名。けれども土人の話によると荒貝澤にはまだ少數のロシヤ兵がゐるとのことであつた。今度はこちらから其奴を征伐してやらふといふので土人の獵銃などをかり集め、一同は勇氣を鼓舞して、荒貝澤に向つた。半里ほど進んだが、露兵らしいものは一人も居らず、唯モーゼル銃が十二三挺、彈藥百四五十發、味噌四五樽、米が十俵程遺棄してあつたのみで、私共は是等も全部占領品として日本人倶樂部へ運搬した。

×

斯くて幾日かは過ぎた。或日の事日本の軍艦が三隻眞岡に入港した。吾々は此遠征の軍人に敬意を表すため、ロシヤ人から牛二頭を、殆ど貰ふ様な安い値段で買ひとり、是を日本人倶樂部長川西幸八の名で贈つた。すると間もなく殘留露人のヌイスキーを使ひとして艦長からの召喚があつた。私は何事が起るかと豫想しながら軍艦を訪れ、やがて艦長の前に導かれると艦長らしい人から、「ヤアー奇遇だネ、君はどうしてこんな處へ來てゐるんだ」と、さも馴れ〳〵しげに言葉をかける人がある。私は改めてその人の顏をよく〳〵見たが、さて誰であるかてんで、見當がつかなかつた仕方なく

「どうもどなたであるかわかりませんが……」と尋ねると

「俺は財部だよ」と云ふ。

元の海軍大臣財部大將である。成程さう云はれて見れば幼馴染で、時には亂暴して困らせた事もある財部だ。軍艦内では色々と待遇され亦様々の物語りをした。そして自分のやつて來た事なども細々と述べた。財部さんは私の勞苦を謝し、且當分在留露人及土人の取締役にする事を依頼した。そして間もなく、日本の陸軍が此地に到着すると云ふ事を知つた。軍艦が出帆して一週間後に至つて、某大尉の指揮する約一中隊の兵隊がどや〳〵と上陸したのである。私は又呼びだされた。そして色々今までの經過を報告し、財部艦長が置いて行つた書面などもみせた。けれども日本人倶樂部占領品であつた様々な品物は、悉く軍隊に沒收され一切手をつける事ができない有様になつた。

その頃今の北濱町の天狗堂酒屋の邊まではアイヌ部落であつた、南は本泊から南濱町にかけてトルコ人が棲んでゐたが、彼等は何づれも相當の金を貯へ、中にはアイヌ達に金を貸てゐるものがあつた、處がアイヌ達はどうしてもその金を返すことが出來ぬ。ために日本の軍隊が上陸すると兵士達に、有ること無い事を並べて讒訴した、兵隊達は怒つてそれらのトルコ人を(五、六戸程)片ッ端しから銃殺してしまつたものである。つまり借金を返へせぬための仕業であつた、露兵達も又非どかつた、日本軍の追撃に遭い豊原から眞岡へ逃れて北へ行く途中、露人の家屋と見れば闖入して、婦女子に暴行を加へ殆ど女といふ女は汚されたやうであつた。

×

其後暫時眞岡に住まつてゐたが軍隊が衛戍してゐるうちは、色々の事に束縛を受け、而も家も殆どないこの地では當分活動の餘地もないと思つたので、一先づ北海道に引揚ける事に決心した。そこで平素懇意にしてゐた軍曹や曹長に頼んで、鰊船を一艘借受ける交渉を隊長に持込んだ。船を借り受けるについては、戰利品の事でもあり、色々の經緯はあつたが、結局給與のかたちで一隻の船と漁具を貰ふ事となつたので、二人の船頭と共に眞岡を出帆し、弟等との約束もあるので阿幸に向つた。阿幸に到着するや、弟等の消息を知り、共に歸帆しやうと思つたのであつたが、不幸弟等は密漁の疑ひで我軍に砲撃されたりしてゐたので、やむなく三日分の食糧を携帶して禮文島に向つた。海上では幾多の危險に遭遇したが、それでも何うにか無事に禮文島に着く事ができた。此處で乘つて來た船を漁具と共に八百圓程で賣却して、船頭にも分配し、私は一先づ札幌に出る事にした。札幌には親類もあつたので、そこで一週間も遊んでゐると、弟等も命から〴〵這々の態で札幌へ引揚げて來た。そのうちに樺太も占領され漁場の入札がコルサコフ(楠溪町)で行はれると云ふ事を聞いたので、再度樺太に向つて出發した。金は親類の者が苦面してくれたので四万圓程出來た。旅行発狀を貰つてポロアンドマリ(大泊)へ到着、其處でテントを張つて落ち着く事にした。十五日に豫定通り入札があつたが、競爭が猛烈で、私には遂に落札しなかつた。その中に楠溪町の市街地の區劃があつた。此時も競爭は却々烈しかつたが、弟壯吉は百方手を盡して二戸分の貸付を

受けたので、此處弟に雜貨商を營ませる事にし、私はウラジミロフカ（豊原）に行くことにしたのである。けれども當時は占領直後（七月二十二日占領）の事であり、憲兵が今の貝塚、中里、淸川の三ヶ所に駐屯して、軍人以外は內地人といへども、一切島の內部には入れなかつた。仕方がないので山越えをして豊原に出やうとしたが、二回共憲兵に見つかつて追返されてしまつた。處が幸ひな事にはポロアンドマリに兵站部の司令官で德江と云ふ少佐が居た。彼は私が軍隊で軍曹で居た頃曹長だつた人でお互に知り合の間柄である處から、大いに同情してくれ、時のウラジミロフカ守備隊の大隊長小島少佐に紹介狀を書いてくれた。今度は憲兵隊の屯所も大手を振つて通過することが出來た。

豊原へ着いてかかは兒島少佐の世話で酒保に一泊し、電信隊豫備兵舍空屋を借ることに交渉がまとまつた。

私はそこに居を定めて、大泊からアルコールや、麥粉、砂糖などを仕入れ、そのうへ旅館と銘打つて營業を開始することになつた。此時に軍人以外で豊原にゐた內地人といふのは軍隊の酒保をやつてゐる渡邊、丸山、佐藤氏だけであつた。佐藤氏は今は故人となつた西谷回漕店の佐藤五三郎氏の前代である。

×

話は遡るが……

豊原にやつて來たときであつた。露兵達が戰ひに破れて逃げるに際し、馬を多數遺棄して行つたので、私は十六頭の馬を拾ひ集め、三頭だけくれて、十三頭で運送業を始めた。豊原と大泊間の荷物運搬をやつたのであるが、兎に角民間で豊泊間を最初に荷物を運搬し人を乘せて通ふたのは私が最初であつた。その頃私は龜屋といふ旅館を經營してゐたが、この旅館が今の花屋本店の前身である。町の中心も舊市街で花屋本店より南一帶は野原で家は一軒もなかつた。そのうちに、軍政署が出來て、豊泊間に輕便鐵道を敷設することなつたので、この區間を五人で請負ふことになり、私は豊原と淸川間の工事をすることになつた、當時は人夫沸底の折柄でもあり、一人頼むのに五十圓の前金を貸さねば來るものがなかつた、私が頼んだ人夫は總數百人、一人五十圓貸して五千圓であつた。處が工事費はどうかといふと、豊原、淸川間が五千圓、どんなことをしても間に合ふわけはない。出來上つてからなんとかなるだらうと着手はしたが、他の請負者はとう〳〵尻尾を出し今一人の請負者を殘してみんな逃げ出してしまつた、豫算がないからと云ふので、その工事は結局五千圓ばかりでみす〳〵損をしてしまつた。

軍政署も大いに氣の毒がり、樺太の鐵道建設の創始者であるとして今後樺太の鐵道のある限り、無賃乘車を許すといふ證文を一枚貰つたものだが、その後暫くして、只乘るとは氣がすまぬといつて、とう〳〵返してしまつたが、今考へると返さねばよかつたとしみじみ思ふ。當時の停車場は今の樺ビル前にある瀨戶山病院（現在岩下病院）の邊りで、同病院の裏にある丸太造りは當時の機關

庫であつた。この建物などは保存すべき價値は充分あると思つてる、その頃私と一處に豊原に住んでゐた者で現在生きてゐるのは野田の丸十旅館の親父と細田代書の奥さんの親と今一人西海岸にゐる男と四人きりであつた。

昭和八年二月二十二日印刷
昭和八年二月二十五日發行

【定價壹圓】

著作權所有 能仲

著者 能仲文夫

印刷者 太田鎮雄
樺太豊原町大通南六丁目一番地

印刷所 樺太印刷合資會社
樺太豊原町大通南六丁目一番地
電話二二一二番

發行所 大泊 豊原 北進堂書店
大泊本局前 振替口座二〇〇八 電話五五三番
豊原西一條 振替口座一四五六一 電話二七一九番

アレン
マクール 共著

農林省技師 石野敬之助氏校閲
バチエラー
オブ・アーツ 高橋關晴 譯

養狐の理論と實際

五百餘頁天金脊皮
寫眞三十五葉函入
【定價四圓五十錢】

新興産業の指針出づ、前人未踏の秘境を拓く世界的名著！追隨模倣の我が養狐界を照す一大光明

賣捌 丸善書店
東京日本橋二丁目

樺太山本養狐研究所

（島内御註文の節は落合山本養狐研究所宛申込み願上候）

當店の書棚はきつと皆樣の御滿足を得ることゝ信じます

新刊圖書
文房具
運動用品
北進堂書店
大泊・豐原

高田銀次郎著

樺太事情

樺太の事情を知らんとするには先づ本書を……

二百二十余頁寫眞挿入
（定價一圓）

發行所 北進堂書店
大泊・豐原

養狐業者の指針書
實驗と學理の記述

一讀あれ

縣元樺太長官序文
樺太中央試驗所長三宅農學博士序文
正見樺太廳殖民課長序文
松下日本養狐協會長序文
元大沼養狐株式會社支配人鈴木太代治著

最新狐飼育

四六版美裝寫眞圖版共二百頁餘　定價壹圓廿錢（送料六錢）書留送料　十六錢

本書は 狐の飼養、管理、衛生、繁殖、毛皮の生産に至る迄著者の實驗と**カナダ**の養狐法則を加味した最新の研究發表

發行所　樺太豐原町東一條南四丁目
樺太養狐研究所

樺太水產組合主事
鈴木太代治編纂

樺太と漁業

（寫眞七十葉挿入箱入美本三百六十余頁）
一部實費二圓五十錢頒布

内容目次

第一編　樺太の統治と漁業
第一章樺太史觀、第二章樺太漁業史觀、第三章開拓使時代の漁業、第四章露領時代の樺太漁業、第五章領土恢復後の漁業

第二編　樺太と漁業組合
第一章組合の創成時代、第二章領有直後の組合、第三章水產組合の設立、第四章樺太建網漁業水產組合聯合會第五章聯合會と其の事業、第六章樺太定置漁業水產組合第七章組合と其の業務

申込所　豐原町
樺太定置漁業水產組合

朝夕刊八頁

樺太日日新聞

樺太新聞界の覇王、三十万島民の羅針盤、完備せる本社の通信網

支局
大泊・眞岡・本斗・惠須取
落合・泊居・知取・敷香
小樽・札幌・青森・東京
大阪・其他各地に通信所

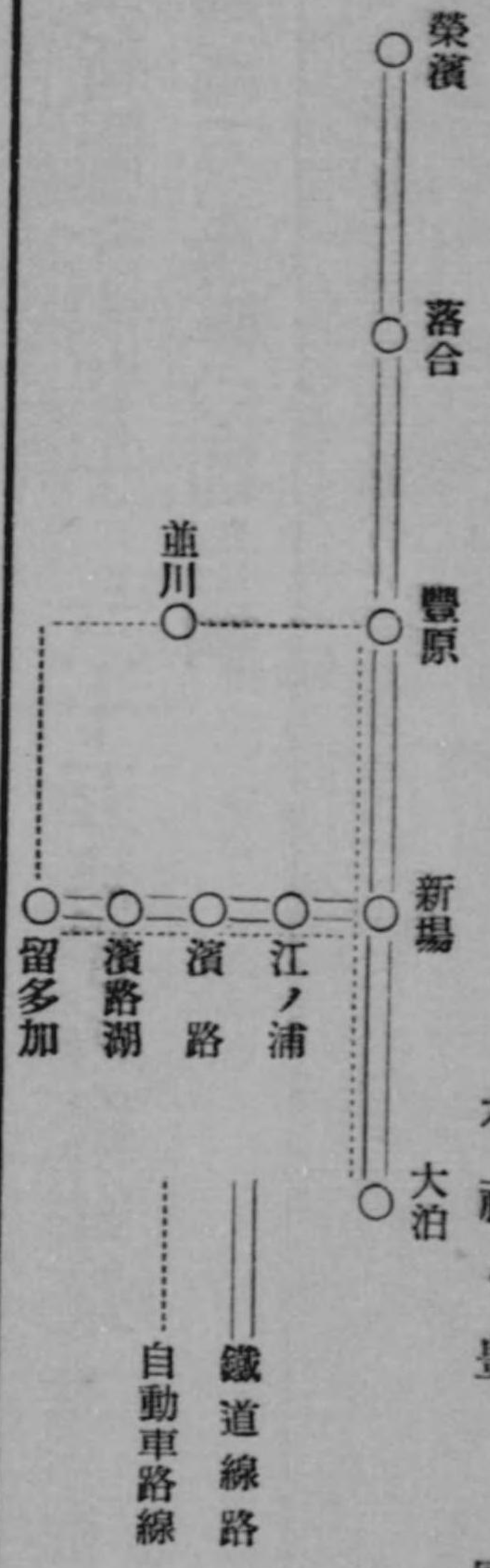
（購讀料一月一圓）

本社　豊原町大通リ南六丁目
電話　二二二　二二二　一一一　二一〇番番番

風光絕佳な濱路湖畔

樺太廳鐵道東海岸線新場驛を起点とする弊社鐵道沿線の濱路湖を中心として、附近一帶を包含する濱路湖公園は、春から夏にかけて、風光明眉な地として、ピクニックに、汐干狩に、海水浴に御家族打ち連れて、一日の淸遊を試みられるには絕好な地であります、冬は又スケートリンクの設備があり、共にスケーターの御滿足を得て居ります。是非一度皆樣の御來遊を御待ちします。
尚弊社經營の遊覽自動車が運轉致します、團体の御申込は特に御便宜を御計ひ致します。

留多加 新場 間



南樺鐵道株式會社

本社・豊原

639
66